



ティー・ブレイク

NO. 89

R.171

郊外の国道沿いの風景は、なんとも賑やかである。コンビニ、飲食チェーン店、パチンコ店、自動車ディーラー、紳士服店、そしてたまにいかがわしいホテルの看板が代わる代わる現れる。

東京暮らしも長くなり、いまや標準語をネイティブ並みに操る私だが、実は、関西生まれの関西育ちだ。そして、数ある国道の中で、私にとって最も思い出深いのは関西の代表的な国道、国道171号線、通称「イナイチ」である。イナイチは京都－大阪－神戸を結ぶ京阪神の大動脈の一つである。

中型バイクをバイトで手に入れ、暇さえあれば能勢、亀岡、六甲などへの日帰りツーリングを楽しんでいた大学時代の私は、イナイチが通る大阪府豊中市で一人暮らしをしており、このイナイチ近辺を生活の拠点にしていたのである。

平凡な大学生生活を送っていた私にも、当時、京都市在住の彼女がいた。行きは刻一刻と彼女の元へ近づく実感が得られる点、帰りは終電の時間を気にする必要がない点で豊中－京都間を「バイクでイナイチ」は私のお気に入りの交通手段であった（そのバイクを「ラブエクスプレス」と名付けた）。走行中はフルフェイスのヘルメット内でミスチルのラブソングをでたらめに熱唱するのが常であったから、一時間程度の運転も全く退屈ではなく、むしろ幸せだった。

幸せな思い出といえば、その彼女との初デートもイナイチ経由のドライブだった。奮発してレンタルした小さな白い車のハンドルを握る私は、電車で阪急「南茨木」まで来ている彼女を駅前でピックアップし、中央環状線からイナイチ経由で神戸の須磨海岸へと向かった。狭い車内がうれしかった。どこをどう走ったのかは覚えていないが、その日、私は一日中運転しつづけ、一日中喋りつづけた。その日の終わりは、彼女をしっかりと京都まで送り、一人ニヤニヤしながらイナイチを帰った。

子供の頃、我が家ではあまり外食する習慣はなかったが、一人暮らしをしていた当時は友人達とバイクでイナイチ沿いの中華料理チェーン店「餃子の〇〇」によく行った。このお店の油はすごい。店内に入るとまず床が油でべとつく。次に、座敷の畳が油でべとつく。勿論、料理も油でべとつく。イナイチ沿いのこのお店に行くと、油こっぴり中華料理で満腹になって、イナイチ沿いの友人宅でダベるのがなにより楽しかった。

* * * * *

そんな当時の「イナイチ」にまつわる思い出に浸っていた私は、長く鳴り響くクラクションの音で不意に現実へと引き戻された。

真っ直ぐな道路、コンビニや飲食チェーン店の看板、確かにそこは10年前の当時と変らぬイナイチであった。

ただひとつ違っていたのは、そこにいる私が、ジーパンに革ジャン姿でバイクを走らせているのではなく、礼服に黒ネクタイ姿で大きな黒い車をただ呆然と見送っている点であった。その車は、29歳の若さで逝ってしまった大切な友人を乗せ、多くの人に見送られながら国道沿いの葬祭場から今まさに出棺しようとしていた。

国道に出た車はどんどん小さくなり、やがて見えなくなった。

見慣れた国道沿いのコンビニの看板が滲んで見えた。

それは決して忘れられない国道沿いの風景であった。

Nさん、ありがとう、どうか安らかに。

(部長)